

古川 武彦
茨城県鹿嶋市浜津賀524-33
携帯 090-9004-8738
ホームページ:「気象コンパス」
<http://www.met-compass.com>
E-mail: takefuru@eos.ocn.ne.jp

1. 書名 「天気野郎の詩(うた)」

2. 刊行の動機・目的

今や気象庁のサービスは、社会の種々の活動を支える不可欠のインフラ情報として、お茶の間から産業界に至るまで、広く利用され、さらに発展を遂げつつあります。現在、日本の天気予報の技術レベルは世界のトップレベルにあり、また国際機関への貢献も高く評価されています。

私は、昭和 34 年(1959)気象庁に入り、以来40年間にわたり、観測・研究・行政の各分野に携わり、この間、米国への家族留学、運輸省への出向、国際会議への出席などを行いました。

退職後は(財)日本気象協会にて技術指導に従事し、その後、2004 年に「気象コンパス」を立ち上げ、現在も気象の教育、講演、執筆を通じて、啓発活動を行っています。この間、モンゴル、ラオス、フィジーでの海外プロジェクト(JICA)にも参加しました。

気象庁は、創立以来、間もなく150年を迎えますが、私のこれまでの業務経歴や関係者への取材、伝聞などを通じて、強く認識していることは、①中央気象台の創設にかかわった明治人の熱気、②太平洋戦争の戦雲が迫る中、軍部の圧力に抗して気象事業の独立性を死守した幹部、③気象観測や天気予報、情報処理システムの開発・実用化などを担ってきた人々の存在です。

別の言葉で言えば、気象に携わることを天職とし、誇りとし、本懐として来た人達であり、私は、これらの人々を尊敬の念を込めて「天気野郎」と呼び、是非とも彼らの営為を後世に伝えたいと念願しています。私も、僭越を顧みず、彼らの末席を汚したかと…。

刊行の暁には、上記のイベントや人々を中心に、私の体験、さらに種々のエピソードを織り交ぜて、ノンフィクションのドラマ風の読み物に仕上げたいと思います。結果として、気象庁の歴史と現在の姿が分かるよう努めたい。

3. 目次案

- 人工衛星「スプートニク」がきっかけで気象庁へ(気象庁入庁)
- 全国一般風ノ向キハ定リナシ天気ハ変リ易シ但シ雨天勝チ (天気予報の開始)
- 天気晴朗ナレドモ波高シ(日露戦争)
- 千代城頭に気象の学府建つ(気象技術官養成所、気象大学校)
- 中央気象台長、軍刀に恐れず(太平洋戦争前夜)
- ゴム風船でジェット気流の発見(風船爆弾)
- ラジオゾンデが 30 kmの上空へ(太平洋戦争がキッカケ)
- 東洋初の電子計算機 横浜港へ(IBM704 電子計算機の導入)
- 大手町から富士山頂のフライヤーの光が見えた(富士山レーダーの建設)
- 1000 か所の気象データを電話回線で自動的に東京へ(「アメダス」命名と展開)
- 気象衛星の愛称は「ひまわり」(衛星の誕生)
- 気象予報士受験者、延べ20万人(予報の民間への開放)
- コンピュータ予報はピタリ 予報官は不要か(AIによる天気予報)

4. 書き振り

織り込みたい事柄の書き振りを以下に記します。

●昭和 34 年(1959)3 月、東洋初の大型電子計算機が横浜港に陸揚げされ、「みんなの天気予報をより正確にする・・・」との横断幕を掲げた超大型トレーラが、深夜の第 2 国道をひた走り、早朝、東京竹平町の気象庁の正門に入りました。この IBM704 の計算機、何と 8000 本の真空管を心臓部に用いており、年間レンタル料は3億円を超える代物であった。気象庁は、この計算機のために空調付きのビルを新築し、また真空管の冷却用に神田の変電所から特別に高圧用の電線を引き込みました。コンピュータを利用した天気予報の始まりです。

この IBM 計算機の導入には、気象庁はもちろん、大学の全面的な協力、さらに大蔵省の将来を見据えての理解など、さまざまなドラマがあった。なお、現在のスパコンは第 9 代目である。



気象庁に搬入されるIBM704

私は、その4月に「気象庁研修所高等部(現、気象大学校)」の門をくぐった。その翌年の昭和35年(1960)、「第1回数値予報国際シンポジウム」が東京で開かれ、各国から新進気鋭の学者達が一堂に会した。会議に合わせて、有楽町の「読売ホール」でアウトリーチの講演会が開催され、新進気鋭の気象学者 Cherney 博士が講演し、私も聴衆となった。英語がよく分からず、皆に合わせての拍手だった。そこでちょっとした椿事を起こした。終了後、聴衆をかき分けて、Cherney 博士に歩み寄って手帳を差し出し、「サイン プリーズ」と言ったら、サインをくれた。未だ紅顔の私が非常に興奮したのを今でも鮮明に覚えている。この Cherney こそは、コンピュータによる「数値予報」の先駆者であり、また日本の数値予報の父と呼ばれた岸保勤三郎をプリンストンの高級研究所に招聘した人物で、この国際会議にも来日し、二人は再会を果たした。



●気象衛星の導入は昭和52年(1977年)、何しろ、気象庁の年間予算が500億円程度の時代に300億円の代物である。「気象審議会」や「宇宙開発審議会」のクリヤー、そして大蔵省との折衝など、「天気野郎」は奮闘した。

それに遡ること15年、昭和36年(1961)夏、アメリカ第7艦隊の旗艦が大阪港に寄

港した。私は単独で見学に赴き、警備の海兵に、「I am a junior meteorologist at The Osaka Meteorological Observatory」と片言英語。彼は OK と言って艦橋のオペレーション室に案内され、そこで何と軍用の気象衛星が撮影した雲画像を見てびっくりし、コピーを職場に持ち帰った記憶がある。

気象衛星の運用には、衛星からデータを受信する通信施設も必要であった。気象衛星準備室の乙部功は、取り付け道路の買収に地主の協力を仰ぐべく日参し、新設された道路は「乙部道路」と呼ばれている。また、200 人を越える技術者も必要となり、米国やオーストラリアに研修留学が行われた。結局、清瀬市に「気象衛星センター」、埼玉県の高山山頂に衛星からの電波を受信する「気象通信所」が設置された。一方、オーストラリアなどの協力で、衛星の軌道を監視する「測距局」も設置された。気象衛星「ひまわり」の名称は、当時「宇宙開発事業団」の理事長であった島秀雄の肝いりで「花」の名が付けられた。ちなみに、日本の衛星に花の名が冠せられているのは、この島理事長の発案である。



その後、気象衛星はスピン方式からヤジロベ方式(3軸方式)へ、また、航空局の航空管制のミッションも負うようになった。この間、衛星の打ち上げが失敗し、米国の衛星を借りたこともある。現在、「ひまわり8号」が運用中で、予備機も軌道上に待機しており、世界気象機関(WMO)の枠組みのもと、地球全体をカバーする 6 基の衛星の一つとして、画像データは国際回線を通じて相互に伝達・交換されている。



5. 古川の経歴・著作など

気象庁研修所高等部(現、気象大学校)を卒業以来、約 40 年間、地方官署、気象研究所、福岡管区気象台での勤務を経て、気象庁本庁で観測や航空気象、予報業務の管理に携わり、札幌管区気象台長で辞職(1999 年)。この間、東京理科大学物理学科で学び、昭和 55 年(1980)九州大学で「理学博士」を取得。

気象庁辞職後、(財)日本気象協会で4年間技術指導にあたり、2003 年に退職して「気象コンパス」を立ち上げ、今日まで、気象に関わる教育、講演、著作・出版活動を継続中。

この間、米国への留学、国際会議にも出席。観測の関連では、大阪で地上および気象レーダー観測、潮岬で高層観測(ラジオゾンデ)に従事。本庁では、富士山気象レーダーの撤去、ドップラー気象レーダーの新たな導入、さらに気象衛星の打ち上げに対する予報業務における対応、気象予報士試験の実施に関与。

気象協会退職後は米国などへの取材旅行で、プリンストンの「高等研究所」を訪ねるなど、現在の数値予報スパコンの源流などを辿り、「人と技術で語る天気予報史(東大出版会)」、「最新気象百科: Meteorology Today の翻訳版(丸善)」の出版、その後「気象学入門(講談社ブルーバックス)」、「気象庁物語(中公新書)」などを上梓しました。最近では「天気予報はどのようにつくられるか(ベレ出版)」、「天気予報入門(ブルーバックス)」を出版。以上のほか、これまで種々の雑誌や朝日新聞などで気象関連記事の執筆を行い、現在、地元、茨城県鹿嶋市広報誌の天気のコラムを担当。また、「かしま灘楽習塾」、「千葉シニア自然大学」、「敬愛大学」で気象講座。

つい最近は、「気象寺子屋」を立ち上げ。そこでは、気象のみならず、洪水、土砂災害、地震、津波などの自然現象の仕組みを学び、避難活動などにつなげる実践も行い、地域の絆を強めたい。講師は、気象予報士、防災士、気象庁 OB、有識者を充て、ボランティアを基本とした運営を目指す。

最後に私のホームページ「気象コンパス」、「気象寺子屋」をご笑覧頂ければ幸いです。